

# 文字の機能と漢字文化

奥 雅 雄

The Function of Characters and the Culture of Chinese Characters

Masao Oku

## は じ め に

文化は、人が「文字」の意味を知ったときに始まり、言葉は、音声と文字の相互作用で華々しく力を増した。手話やしぐさ、合図も言葉の一面であり、さらにイメージを融合しようとしている。かな漢字表記の日本語を中心に、文字、言葉、文化の関連を解きほぐしてみたい。

## 1. 時代の変革と文化

### (1) 今、臨む社会の変節点

われわれを取り巻く環境が大きく変わろうとしている。①ミレニアム、②日本経済の閉塞、③連なる変革の波、④デジタル化などの変化の嵐の中にある。

ミレニアム（千年期）がキリスト教に縁のうすい日本人にとっても西欧文化の影響下にあることを示している。2000年問題とともに西暦が生活に根ざした文化的区切れ目であり、時間の色が変わるかのような印象を与えている。

あたかもこの時期、日本経済は閉塞し、未来に暗い陰を落としている。これを日本経済の行き詰まりと考えるのではなく、これ以後の変節点と見なせば戦後たかだか50年の歴史ではなく、ずっと長いスパンの節目となる。それはアジアや世界に開かれた日本経済になるべきであるし、アジアにとって日本の経済なくして発展はあり得ない。海外の国々がいっしょになって一層優良な製品や商品を充実し、お互いに豊かになっていくことが21世紀の経済の姿である。

東西冷戦の終焉あたりから変革の波が立て続けに押し寄せてくる。国内でも政治不信、官僚の権力構造をはじめ、国や地方での矛盾が噴出し、腐敗が蔓延しているような印象を与えた。経済が失速し、銀行をはじめとする企業の行き詰まりに、高い失業率、給与の切り下げが続き、「日本は大丈夫なのか」という不安感が襲う。個人は生活防衛のために消費を将来に向けて備える行動にでて、さらなる経済の後退をもたらした。

波は折しも少子化の教育にも襲いかかり、校内暴力や学級破壊が起こる。ゆとり教育の言葉のイメージは良いが学力低下が現実の問題となって大人たちが戸惑っている。今後も病院、国策事業、自治体など合理化をせまられるものが居並んでいる。

デジタル化は通信、放送を巻き込んで急激に進んでいる。コンピュータやインターネット、携帯電話、衛星放送など驚異的に押し寄せてくる。

文化を考える上で1番のベースともいえるべきものは「言葉」と「文字」の問題である。「言葉」の歴史は記録に残らないので始まりの時期をおさえることができない。ラジオや電話の歴史は

20 世紀とともに発展したと言ってもよい。それも革命的なことだと思う。それらをひっくるめて「エレクトロニクス革命」あるいは「情報社会への転換」という。数千ないし数万年の歴史の中で飛躍的に制約を取り払った出来事である。デジタル化は特にここ前後数年の画像や音声・音響にとっての大転換点になるだろう。

同様に「文字」についてもワープロや電子メールの歴史は 20 世紀の最後に登場し、高々ここ 20 年の歴史である。漢字の 3000 年の歴史にとってはたった今の出来事ではない。その漢字にかかわる歴史を概観しても紙の発明、印刷技術の登場、FAX の浸透などである。個人でパソコンなどをもち、美しい印刷物が作れることは、現代の変革の凄さを感じさせる。

漢字は千数百年にわたり日本語の歴史のなかで大きな変化を受けずにその機能を守り続けてきた。明治以後に国語改革は何度か行われたが千年前の言葉が今でも使われていることが多い。1990 年代に電子メールが市民権を得て地球規模でかつ時差的制約を超えて使えるようになった。まだまだ始まったばかりの歴史でどのように発展していくか未知数である。

## (2) 漢字・日本語の歴史

漢字が日本語の記録に使われ、定着していく過程を概観する。

中国で発明された漢字は、政治と結びついて未来を占う偉大な力を持って登場する。統治・支配のツールとしてなくてはならないものに成長していく。組織を支えるために、また大きな組織にとって記録・報告は欠かせない情報伝達手段であった。一族や地域単位での統治には口頭による命令や伝達で十分に機能する。組織が巨大になると伝達さえ何ヶ月も要し、時間の経過とともに情報が変質し、中継する人々の間で解釈相異が起こる。広大な中国の大陸を治めるために漢字が発展していったと言ってもよい。

漢字は仏教の龐大な精神世界を表現するために利用された。六～七世紀、大和時代に仏教が伝来し浸透していく。それは同時に漢字の文化の始まりでもある。七世紀、玄奘三蔵が天竺まで一七間年の西遊の後に帰唐、梵本 657 部を持ち帰る。玄奘は漢訳に打ち込み、その後に続く仏教・仏典に大きな影響を与える。日本では玄奘のその功績を今でも受けている。1000 年以上に渡って儒教やその他の精神文化とともに人々の心のありように関わってきているのである。

中国は唐の時代に世界で一番先進性を持ち、あらゆるものが長安の都に集い文化の集積地となった。さながら現在の日本に外国人が行き交う状況が中国文化の爛熟期の長安にあった。日本は大和時代の建国の時期に中国の壮大な文化に触れる。漢字、政治機構、都市計画、仏教その他の文化を遣唐使によって精力的に吸収していった。

大和朝廷の政治機構が確立する時期に、大陸からやって来た人々は大和朝廷の政治に関わって、文字を認識し、論理にたけた官僚機構を築きあげるコンサルタントように活躍しただろう。千年余り前の政治機構は現代の企業組織と似て、貴族は官僚として現代のサラリーマン的側面も持っている。組織のコミュニケーション手段として文字の読み書きができ、文化人として歌をよみ漢文・漢詩を解する風流人的二面性が見られる。

大和朝廷が確立して記録が残されはじめる。日本書紀は八世紀に成立し、以後歴史記録が続いていく。文字として残されるかどうかは情報量の格段の差がある。七世紀は言い伝えなどから日本書紀や古事記に記載されているが六世紀以前の事項は極端に少なくなる。その前は中国歴史書三国志の魏志倭人伝などによらねばならない。

10 世紀には「かな」が作られる。和紙は貴重なものであったが平安時代には使われていた。源氏物語を代表とする文学的背景が整い世界遺産とも言うべきレベルの平安文学が展開していった。

江戸時代、時代劇にも登場する「瓦版」は印刷技術も優れたものがあつたが新聞・雑誌としての役割を持っていた。読み書きなどを教えた寺子屋制度も教育のしくみとして先進性を持っていた。こうしたベースにより明治維新を割合にソフトに乗り越えられたのではなかろうか。

明治期には郵便制度や新聞、書籍が大衆に浸透していく。

## 2. ヒトの情報処理

人間が個人で行う情報処理は、生存そのものであり、作業と思考が織りなす過程である。

### (1) 一般的な情報処理

情報を作り出す過程を情報処理あるいはデータ処理という。

データ → 情報処理（データ処理） → 情報

コンピュータの処理をいうことが多いが、本来は人間が行う作業だ。能力は習慣性があり、体力と一緒に常に鍛えてないと使えない。年齢と共に能力が低下するというのは思い込みが多く、習慣がないだけだ。

一般に情報の処理には次の過程がある。

集める	元データを収集する	アンケート、店口の販売情報など
貯める	保存しておく	日毎、週毎、月毎に資料を出すため
加工する	情報を取り出す	平均などの統計処理、他のデータとの比較、 各種率などの算出、グラフや図形化
配る	利用者に届ける	レポート、新聞、雑誌、ニュースなど

加工後のデータであるレポートも利用者のさらなる情報処理によって決断や行動につながって意味を持つ。合計や平均の意味を理解できなければ単なる数値である。グラフを書いてみたところで資料としては見栄えがよいかもしれない。それらの資料が活用され、最終的に何かを生み出さなければ気休めである。ただし、資料がないのであれば、それ以前の作業で時間がかかってタイミングを失する。

決断は不透明のままなされることが多いから、言葉にできない高度の能力が求められることになる。自動化・機械化にあわせて人間自身の能力の向上を図ることが重要だ。

### (2) 個人的な情報の処理

文字の読み書きは作業的に行われるが、作業的な部分は省いて頭の中で行われることを中心に検討する。

ものを考えるとき、言葉と連想するイメージが入り交じっている。言葉は明確に声のように意識のなかに響いてもいる。「意」が「心の音」として組み立てられているのもうなずける。その「心の音」は言葉として具体的な視覚的なイメージを想起させる。そのイメージは夢の映像のように背景があり、状況が具体的にみえる。ただ視覚経験がある場合はそのときの体験のイメージだが、抽象化された事象のときも実在しない空間の中にあたかも視覚的な実体のように描き出されている。そのシーンの特定部分に関心が集中し、クローズアップないし、概念として再び言葉へ結び付けられる。

以後、言葉とイメージが連鎖しながら、思いが巡っていく。時々には自分の好きなことへ流れながら、軌道修正を繰り返し、何かが作り出されていく。この個人の思考活動の一過程が、ものごとを創造していく過程でもある。

途中には計算や別の資料の参照あるいはメモ・ノートへの記録などの作業で中断がおきるが、自分の価値観から生じる選択、評価基準をもとにイメージ空間を渡り歩くのである。評価基準は社会規範や自然あるいは論理であるが、超越的なときもある。

マルチメディアがデジタル技術の対象として華々しく登場し、ゲームやCG映像として強い印象を与えている。一方、人間のイメージの処理に未知の能力が潜在しているきざしがある。低年齢からの訓練が必要かも知れないが、連想からの閃きのイメージは潜在意識下で起こる不可思議な処理だ。基本的には自然界での生存に視覚が果たす役割から、危険を記憶し、瞬時に思い出して回避する能力にかかわっているように思える。それらは文字を認識して行く過程でも関連があるかもしれない。

思考は感情と結びついている。感情こそ思考を評価する最後の基準である。個人の情報処理過程でも好意を持つ事象に引かれることになる。それらが傾向として思考や行動を規制していく。はやりの良いイメージの語彙として「自然」と「街道」がある。「自然」は環境保護からのムードが良いイメージを与えていると思う。「自然派志向」とか「アウトドア」に通ずるものである。「街道」は歴史の裏付けと歩行に適した自然や冒険的要素を含んでいる。どちらも都会の喧噪からのあこがれがある。

一方、人の心を逆なでするような語彙もある「絶滅」や「負の遺産」など現代先進社会が抱える途方もないマイナスの語彙群である。何時の時代にも社会の厄介事として多くの言葉が作り出されてきた。

日本語の一番古くからある言葉が大和言葉だ。万葉集を代表とする和歌などに使われている。現代の歌でも歌詞の多くは大和言葉で、柔らかく優雅に聞こえる。意味や響きも気持ちに馴染みやすい。大和時代、平安時代に中国から借用し定着した漢語、漢字の熟語の大半は堅い印象を受ける。政治や法律に権威付けに使われる。最近では行政も難しい言葉を避けてソフトなムードに変わりつつある。現在の傾向は欧米からの外来語の氾濫だ。意味は伝わらず語彙の響きの恰好よさが先走っているように見える。

大和言葉	漢語	外来語	英語
いつまでも	永久に	フォアエバー	forever
さだめ／めぐりあわせ	運命	デスティニー	destiny
真新しい	新品の	ブランニュー	brand-new

ものごとを理解するのに妨げとなるものがある。雑音や曲解させる要素である。魚編の文字は中国語での魚と日本でのそれは異なることが多い。ヨーロッパでは「たぬき」と犬の区別ができず。セミは日本では珍しくないがヨーロッパにセミがいない地域があり、「ありときりぎりす」のキリギリスはセミがモデルであった。

もので指し示せない事象には認識が困難なものが多くなる。まさに異文化である。この文化を理解し得ないと言葉は置き換えられない。翻訳の壁になる。乗り越えるにはそのまま外来語として取り入れるか、言葉を作る必要がある。そこに言語の柔軟性と充実度がある。包容力のある言語は旺盛に新しい文化を吸収しどんどん成長していく。まさに日本語は大和時代の唐文化、明治以後の西欧文化を言葉とともに吸収して成長していった。

### (3) 集団の情報処理

集団に重要な①創出機能、②命名機能、③結束機能はすべて言葉などのコミュニケーションによって達成される。それを検討してみる。

a. コミュニケーションの意味

集団が結成されているときに一番重要なことは「何かを生み出す」ことである。企業の場合であれば商品やサービスを提供し続けることが必要だし、国や自治体では国民や住民の福祉の向上などがある。

創出機能の典型例は、新商品、新サービスの開発がある。はじめに調査や情報集めが行われ対象領域が把握される。それと同時に現象や特定の事項に名前付けが行われる。仮の名や俗っぽい名前であるが、この切り口が成否にかかわる。商品の直接的機能定義よりも人間的価値観で表現し、専門家としての領域の絞り込みと万人への普遍性の両面が必要になる。概念構成と用語の創作である。ものづくりは未知の概念を作り出し、言葉にして概念の関係を明確にしていくなり。それは、以後の開発指針として働き、開発メンバーを拘束する。

この創出機能の実体はグループの協働的な成果にある。話が通じてはじめて実現が可能になる。日本では非公式な組織、仲間関係、酒やゴルフなどの仕事以外での強い結びつき、徹底した配慮による根回しなどが優先している。波風を立てない人間関係がコンピュータによるネットワークへの切り替えの必要性を阻害しているように思える。導入されても主要な意思の決定は、夜の人間関係に左右されたりする。また「以心伝心」、「一心同体」、「腹をわって」などコミュニケーションを超越した言葉が多く、心理的な結合力の方が求められてきた。

仲間意識により、ある意見に同調したり、友好関係だけで無批判であったりすることの発展性のなさが問題である。レベルの高い意見として批判を受けながら、より洗練された次元に高める努力を欠いている。仲間だけで慰め合う時代は過去のものになっている。難しいことを、無理と思われることを成し遂げて、市場から評価されてこそ真の喜びがある。これがものごとを生み出す苦しみであり、達成時の喜びである。ネットワークは、コミュニケーションの置き換えではない。コミュニケーション自体の改革を同時にすべきである。

コミュニケーション手段がどのように変わろうと日本では日本語だし、文章では仮名と漢字を使って行う。日本の聖域に切り込み、論理的表現で意思や意見が伝わってこそ新しい道具の効果がでてくる。電子メールが若い世代からうけられているが「恰好が良い」とか「ブーム」的に終始し、中身の希薄なものでは意味がない。人の成長速度が高まり、高度の能力を持つことが第1目標であるはずだ。社会が複雑化し求めるものが高度になるにしたがって、提供する側の一層のレベル向上を電子メールなどの道具が可能にしている。

2つ目に命名機能がある。誕生したヒト、商品、サービス、概念などを社会的に認知する働きである。できあがったものを使っていく段階での機能である。創出時の名前がそのまま使われることもある。企業は商品名に多大の費用をかけて商品に仕上げていく。「ブランド」といわれるこの名前の重視戦略は現代消費社会のキーファクタである。商品間の品質に差異を認めにくいほど洗練された商品はブランドによって安心感やステータスを与えられる。一方、親から贈られる人の名も一生付き合いあう名前だし、長い期間にわたって当人に影響を及ぼす。人間関係の最初の糸口となる名刺も個人の看板である。「名は体を表す」はまさにその人のイメージを伝える。

言霊思想や姓名判断による命名は迷信でいかがわしさを伴うが、別の意味で名前には見えないう力が働いている。現代的に言うと言感からくる共感やムードであり、連帯感や存在感、所有欲やステータスを満たすものとしてシンボライズされている。

これらのことは企業でなくて研究活動やボランティアにも例外ではない。活動に伴う以上スムーズにことを運ぶために避けて通れない。自然科学や社会科学のなかで新たに登場する研究対象に新しい用語が出てくる。はじめは混乱するがやがて統一的な言葉に収束し、はるかに長

い時間にわたって研究分野を規定していく。たとえば「複雑系」が一時のブームなのか、何世紀もかかって確立していく巨大科学的アプローチになるのかわからないが、ここ数年でかたまってきた用語である。カオスやフラクタルの領域を含み、コンピュータも駆使しながら新しいものの見方で世界を捉え、画期的に成長していく可能性を持っている。そうした用語は「新大陸」や「新世界」などのように興奮と情熱を引き起こし、夢を与えてくれる。

3つ目の結束機能は集団に自己組織力を生み出す。自己組織力は集団メンバーをつなぐ糊（グルー）である。経済的報酬、帰属意識、処遇、仕事の質、人間関係など多くの要素が作用しているが、どれもが心構えにかかわっている。受け取り方によって良くも悪くもとれる。その実像を話し合い、結束して目的を達成していく力強さに裏打ちされてはじめて未来が描ける。上に立つ人のやる気なさ、不誠実さなどマイナスイメージのコミュニケーションは、組織を破壊方向に導く。

社会的犯罪や組織のスキャンダルの多くも一種のコミュニケーションの失敗が起因している。トラブルの後で「知らなかった」とか「言ってくれれば」が発せられるがそのもどかしさ上司自らが何もやってないのだ。意志を伝えようとして逆の作用が生じやすい。市場や仕事の厳しさよりも上司自体の厳しさが伝わってしまう。「近い存在ほどトラブルをおこす」や「まわりからの影響力」のことを知っておくべきだ。言葉の響きは悪いが「さくら」の持つ意味合いを考えるとわかると思う。巻き込み戦法の1つの手段になる。

高度の仕事を達成可能にし、自己を成長でき、未来に希望が持てるなら必然的にコミュニケーションは改善する。そのような環境が整ったら上司は、力づくで仕向ける必要はなくなる。自然に挑戦ムードなのだから。その状態への第1歩はみんなが納得し、向かうべき方向を手探りで捜さねばならない。共感や良い言葉を話し合い共有することである。「楽しい」、「美しい」、「希望」、「発展」、「あこがれの対象」などから展開する心が動く言葉がキーワードだ。マイナス面の批判は良い効果を得られない。プラス面を増強していくアプローチが良いと思う。

#### b. 伝達しやすさの比較

集団内で情報の伝達の効率面の違いを比較する。「会話での伝達」は単純事象の確認や数語の語彙程度では効率的に伝わる。電話でやってみるとよくわかるが意外と伝わらない。面談的に見えるところで話せば「身振り」や「表情」が言葉を補っている。大量のときは視覚による方がはるかに楽にものごとを伝える。会話でのネックに漢語の熟語がある。古代の中国から借用した漢語は本来元の音声を持つ違いを欠落し、日本語では同じ発音で区別できなくなる。「私立」、「市立」や「仕様」、「使用」、「私用」、「試用」などは漢字を説明しないと意味を間違ってしまう。「書き言葉」の方がはるかに明確に受け取れる。会話での良い面は聞き直しができることである。手紙でのやり取りは時間がかかるから、時間の経過がゆっくりしていた時代にはよかった。ふたたび文章でのやり取りを可能にしたのが電子メールである。音声会話より厳密に伝わる。最近では活字離れから活字への復帰が進み、文学などへの支持者の増加や日本語ブームが起きている。電子メールの別の角度からの効用だ。

教育には講義形式が使われる。会話を主体とする形式は、書き物の用語が理解できない初心者、未熟者に有効だ。読みとるベースがあれば、書き物を読む方が効率的になる。

「絵」や「画像」での伝達は補助的には威力を発揮する。しかし、意思を伝える場合や目に見えない概念を伝える場合には無力である。「アルプスに来年登りたい」と思って山の写真を見せても言葉なしでは意思は通じない。同じように「アルプスの登山の歴史」や「アルプスのヨーロッパでの意味」など絵や図のみによっては表現できない。単純な名詞で指し示せる概念レベ

ルから一步進んで、語彙と語彙との結合ないし複合したもののとしての言語の威力こそ人間の思考空間を拡げていく強力な発想手段となっている。「アルプス」の拡大した発想から「日本アルプス」、「アルピニスト」に概念を拡げ、「アルペン種目」などオリンピック競技種目なども派生してくる。

実際の伝わりやすさには、受け取る側の心理や意欲、発する側の雰囲気作り、展開のリズム・メリハリ、集中度のコントロールなど多くの要素が絡んでくる。

#### (4) 漢字への変化圧力

時代の変遷に従って語彙の意味が拡大してくる。それまではなかった物や概念が旧来の語彙の意味を拡大して解釈され新しい用語となる。「鉛筆」、「筆記具」は、「筆」はなくても相当物として残っている。「灯」は火から電氣に変わった。新しい文化や異質のものであると、熟語の造語やカタカナの外来語とする場合もある。

例として「経」は元々、「經」で、つくりは徑、莖、頸、脛（それぞれ径、茎、くび、すね）などとまっすぐいことを示している。いとへんと組み合わせて織物の縦糸を指す。それは縦糸のように流れる時間を示すためにも使われ（経る、経過、すじ道）、さらに道理の意味へ広がる。論語に代表される儒教の原典は經書（四書五經）とよばれ現代にも通用する社会の原理原則が盛り込まれている。仏教の經典もこの文字が使われ「お経」の意味を受け継いでいる。緯は横糸を指し、経緯は座標をしめす。これが経度、緯度、経緯（いきさつ）となった。経済も経国済民あるいは経世済民から派生した。

明治以降に登場した語に以下のものがある。

「哲学」、「心理学」、「主観」、「範疇」は西周（にしあまね、津和野出身、1829～1897）の訳語  
「形而上」、「形而下」は井上哲次郎（いのうえ てつじろう、1855～1944）の訳語  
「小説」は坪内逍遙（つばうち しょうよう、1859～1935）による novel の訳語  
「版權」は福沢諭吉（ふくざわ ゆきち、1834～1901）による copyright の訳語  
「進化論」、「生存競争」は加藤弘之（かとう ひろゆき、1836～1916）による訳語

### 3. 機械での情報処理（デジタル化と日本語の表記）

第二次世界大戦後に漢字は大きく変化した。中国本土は簡体字として煩雑さを軽減する改革がはかられている。近代国家としての国語の統一が国家成立基盤として働いている。台湾では一番古い漢字の姿を留めている。

日本では、国語審議会が漢字使用制限のつよい当用漢字（昭和 21 年、1850 字）として発表、その後、制限を緩めた常用漢字（昭和 56 年、1945 字）に変わった。人が日常使う漢字の基準で新聞などで馴染みの範囲である。

デジタル化から次のような漢字への取り組みが行われている。

#### (1) コンピュータ上での文字の扱い方

日本工業規格で規定する漢字の標準がある。JIS コードや区点を決めている。区点は縦横に配置した表での位置関係を示す。

「JIS X0208 情報交換用漢字符号」（1978 年、6355 字）

第 1 水準 2965 字、第 2 水準 3388 字に別れている。

「JIS X0212 補助漢字文字セット」（1990 年、5801 字）

「JIS X0221 Unicode の日本版」

「JIS 漢字の拡張計画」原案 符号化文字集合調査研究委員会 (JCS) がまとめた。

今年度中に新 JIS として発表される予定。第 3, 第 4 水準に位置付けか？

国際化に伴って ISO 規格となった次の Unicode がある。

「ISO10646 多言語を扱うための多重言語文字セット規格」

アメリカの業界で進められた Unicode の取り決めが中国や日本の文化を無視したかのようになり、当初非常に反発が強かった。漢字文字数の制限から CJK 統合漢字 (China Japan Korea Unified han Character) として統一を図った。現在では、区点 (256×256 文字) に面 (256)×群 (128) を加え約 21 億種類の文字を可能にして当初の矛盾を改めた。これで世界中が快適に同居できる条件が整ったことになる。言語の多様性を考えるとまだまだ新しい問題も孕んでいるが、同一文書に何か国もの言語の混在が可能になる。標準の段階と現実の使える設備は別問題であるが、現在マイクロソフトの最新ソフトでは Unicode を使って JIS の 6355 文字と補助漢字の 5801 字の漢字が使用できる。かなり改善されてきている。

その他の標準として次のものがある。

XKP 拡張漢字処理仕様 Windows NT 上で使える業界団体の規格である。

EUC 拡張 UNIX コード UNIX で使う。

TRON プロジェクト 十万字以上の文字を扱える。

RFC 1468 インターネット上の文字の扱い

シフト JIS マイクロソフト社の漢字を扱うときの仕様、事実上の標準

文字を表示または印刷するためにはフォントが必要になる。漢字の活字に相当する表示パターンをすべての文字について用意する必要がある。文字数が増えるほど容易でなくなる。明朝体やゴシック体などのように統一した書体を何種類も作ると開発負担は膨大になる。

標準と標準の間に取りまとめの経緯と課題が存在する。JIS は当初、一般に利用するにはほぼ 99% 以上問題はなかった。しかし、歴史、中国古典、仏教、国際関係を文書化するとき限界が生じる。90 年に補助漢字を決めたが現実のコンピュータ標準がマイクロソフトの Windows であったため、シフト JIS の制約から補助漢字を使えなかった。その後マイクロソフトは Windows などの改良により、Unicode に移行し、補助漢字までの 12,156 字を扱えるようにした。一方 JIS はシフト JIS を認める方向に歩み寄り、今回の JCS の新 JIS を取り決めた。そのため今度は、外字が扱えない規格になっている。任意の一般多数を相手に情報交換 (文書のやり取り) を行うときは外字がない方がよいが特定企業内では必要な場合がある。新旧両規格のコンピュータ間で情報交換するとトラブルが起きる恐れがある。

今では Unicode は JIS とのすりあわせにより改善が進んでおり、多くの日本人専門家が標準の改革に努力している。

## (2) ネットワークの威力

インターネットは特に WEB と電子メールでネットワークを日常的なものにした。距離を縮め、地球的時差を緩衝し、人の時間的拘束を緩めている。WEB は世界規模のデータベースでもあり、路地裏的情報の宝庫でもある。非常に安い費用で情報を得られるが、「有用な情報はコストがかかる」のが普通だから只だと思っていると変わりに時間的拘束によって代償を支払われる。

WEB の作成のノウハウについてすそ野が広がり、非常に優良な WEB が広がってきた。情報の新しいしかも強力な流通経路が登場したのだ。海外向けには、最低、日本語版に加え、英語



版でも WEB を用意する必要がある。逆に海外に日本語ファンを増やす機会が増した。

図書館がネットで自由に閲覧できる時代も間近だが、著作権問題なども解決しなければならない。10 年しないうちに WEB でドラマなどの映像が見えるようになり、テレビと電話とコンピュータが融合した機器へ成長し、家庭内のあらゆる設備がネットでつながる。テレビの普及期と同様にネットワークが生活に不可欠の存在になり、内外のあらゆる「人」や「もの」との対話の窓口になるだろう。

### (3) ソフトウェアと情報

情報が集積すると便利になると同時に探し出すことが困難になる。検索という機能について知っておくことが大切になる。WEB では電話帳が果たすのに似た役割を検索サイト (yahoo など) がやってくれる。個人のデータについても整理方法や検索の知識が不可欠である。旧字や異字体の検索モレに注意がいる。

HTML や XML は WEB 情報を記述する言語であるが、一群のこれらの言語はハイパーリンクによって資料間の関係を規定したり、内容の属性について自己規定し、図表、画像や動画を表示できる。イメージが一体になって言葉を補強する。それは言葉の拡張と見ても良い。資料そのものがプログラム機能を持って時と場合によって資料が自ら変化する事も可能になった。紙の概念を超越した資料として新時代の可能性を秘めている。ネット上でなくてもワープロ以上の身近な表現手段として活用できる。

マイクロソフトの Windows をはじめとするソフトウェアは負担や不安定さで常に批判を浴びながらも大きく成長してきた。世界市場の大半を占め、絶大な標準を果たしている。現在オフィスで行われている複雑な情報を扱う操作をいとも簡単に可能にした功績を認めるべきだと思う。それは Windows が持つグラフィックなユーザーインターフェースが現実的な観念として理解しやすいからだろう。

Windows のシンボリックな絵 (ショートカット、アイコン) は漢字の象形性に近いものである。ただし数が増えて複雑になると絵で区別しにくくなる。日本語は漢字での識別性が良く、絵を使う意味は薄れる。画面上でも英語に比べ表示幅が短く、小さい領域に多くの意味を込めることができて有利である。

## 4. 新しい社会の構成

### (1) 情報社会

世界はオープン化の時代を迎え、ますますグローバル化していく。日本のあり方も経済や国際貢献など改めて行くべき事項が多い。国境を越えたつながりが増え、海外の事件や事故が直ちに国内まで波及する。世界の一体化が着実に進行している。共通化とともに独自の文化は尊重されなければならない。日本語放棄論や日本語への強要による文化侵略はあってはならない。

アメリカの多国籍企業に比べ、日本の企業が世界に進出して歴史が浅い。まだまだ言語や文化が壁になっている。それ以前にアジア文化が意外と知られていない原因はどこかにアジア軽視の態度があるのではなかろうか。

ネットワークはコンピュータのネットワークシステムをいう場合と人間同士のつながりをいう場合がある。二つのネットワークを通して新しいつながりができていく。まさに新時代の集団を構成する結合である。国の元首同士の友好が象徴的にムードをつくり、個人個人のつながりが浸透していき、新たな国際関係が成長していく。うんと長い時間を考えると国民国家的な

帰属意識は相対的に弱い関係になり、世界中を横断する仲間意識が重きを増していく。国民という紐帯からネットというグルー（糊）による結合集団が重層的に形成されていく。「武」から「文」へ転換したアナロジーが「国家関係」から「個人交流」への転換にあり、社会構造の変容が始まっている。

資本が世界のいろいろな曲面で影響力を及ぼし、金が富を牛耳る。経済が発展していくことには夢があり、豊かさへのあこがれがある。情報も未来への希望を膨らませる。情報が価値を持つことは、情報＝金の置換が起こる。情報を操ると世界中を操れる危険性を持っている。情報は物と違って流れを把握しにくい。監視、盗聴、検閲など正義のためでもマイナスのイメージが伴う。情報の性質にこのような面があることを1人1人が知っておく必要がある。知らず知らずに統制、情報操作、情報隔離、虚偽情報をうける。

商品開発では優良な情報を持つところが市場で優位を持つ。そのこと自体は良いことだし、企業同士競争して優良な商品を提供することが求められる。企業が持つべき情報の1つは「何を作ると喜ばれるか」であり、2つ目は「どのようにして作るか」だ。前者はマーケティングであり、後者は主に製造技術である。そのそれぞれが情報として刻々とよりよい状態に更新し続ける体制ができていてこそ、タイミング良く的確な商品を提供できる。

## (2) 文化遺産

今日の科学技術をベースにする社会の発展は、ヨーロッパ中心のヨーロッパが世界をリードする原理となっている。巨大科学や企業がかかわるものはアメリカがおもてに立つているが源泉はヨーロッパにある。

世界標準化機構 ISO は独自のスタイルで ISO 9000 シリーズ（品質を規定する標準）、ISO 14000 シリーズ（環境に関する国際規格）を発効させた。あれほど品質に自信を持っていた日本がかろうじてついていっている状況だ。このようなアプローチを先駆けてリードしていく文化が日本には欠落している。

ISO 14000 は立ち後れた日本の現状を見事に映し出す。社会問題を対象にしながら製造業のものづくりにかかわる。ごみ問題は循環型の社会への移行を真剣に考えないといけない問題だ。海洋や大気汚染など垂れ流しの後始末の悪い社会から離脱すべきなのである。今まさに未来に良いものを残す分かれ目に立っている。

かつて「漢字文化圏」という国々が存在した。中国を盟主とする朝鮮、ベトナム、日本である。「筆談」で漢字の会話ができた。簡体字や日本の国語改革で通じなくなってきた。韓国は公式にはハングルでも潜在的な漢字へのあこがれを失っていない。日本との経済的な関係からも漢字への復活論がある。Unicode の登場で改めてこれらの国々が遠いと感じる。古くから文化の共有をしてきたのに哀しい歴史がいまだに反目しているようにみえる。サッカーのワールドカップも日韓の関係に画期的な視点をもたらした。ふたたび漢字がこれらの国々の間で役立つこともあり得るし、世界中に漢字を拡げることの可能性も出てきた。CJK 統合漢字を考えると、文化の隔たりの大きさを感じるし、一方で世界を統一的に見る視点が新たな世界文化の生成を予感させる。

## (3) 日本からの発信

日本は論理的思考よりも文化的背景に影響されやすい傾向がある。多くが不満を持ち、経済大国でありながら低い満足度しかない社会構造が変わらない。矛盾をはらんだままの社会が改められることがなく、社会形成が未熟といえよう。その面を改めるためにもコミュニケーション

ンが必要だし、国内での議論の場を増やして行くべきだ。

新しい文化を創ることは日本語の言葉を厳密にし豊かにすることだ。大和時代の建国期，明治期のように，社会が成長したとき言葉は自然と増える。成熟した社会を形成するためにもよい，わるいを評価し，みんなが意思表示していけるシステムが必要だ。ネットワークやデジタル化がそのように機能し，世界の手本になる仕組みを生み出すことを望みたい。

日本には日本語の弱点から発達した製品群がある。欧米のタイプライターは文字・文章の合理化・自動化を早くから引き起こした。漢字の複雑さが壁になり，致命的な欠陥に思われた時期もある。ファックスは複雑な文字をそのまま送れる画期的な機器になった。さらにプリンタやディスプレイでは，複雑な漢字を出せるなら同時に図形を扱える。こうした機器類への取り組みは飛躍的に技術を伸ばしたと言ってよい。いまでは小型の機器類（電子カメラ，カーナビなど）が日本文化の代名詞のようになっている。

かつての演歌はカラオケと供にアジアに波及した。これも海外で受け入れられた日本文化である。演歌と欧米の音楽が融合した J-POPS がアジアに流れている。まんが，アニメ，ゲームなど世界が注目する多くのものが非常に厚い層をなして存在している。

多くの面で可能性を持ち，新分野を切り開ける能力を持つ日本文化なのだから自信を持って進めていけばよい。世界に通用する思考力を持ったならばさらに世界の標準になるものを進んでリードできる。ゲームではたしかに実質の世界標準といえるかもしれないがアミューズメント領域まで拡げて考えるとアメリカのデズニーランドや映画産業などの発想，規模に驚く。

世界中に日本を見習う国がある。豊かさへのあこがれが，虚構の現実にならないように真に良いものでありたい。まねられる文化は評価されることだから大いに喜ぶべきだし，世界を良い方向に導く良い手本でありたい。そのためにも日本が新しい文化を生み出し，みがいていく責任があると思う。文化のおおもとに日本語があり，ものごとの思考手段，伝達手段が日本語なのだ。それを物理的手段で飛躍の革新の可能性を持つデジタル技術が制約を取り除く。さらに循環して日本語を豊かにし，精神的にも物質的にも厚みを増すならば思考の濃度はより一層高まる。日本語とデジタル技術を活かさなければならない。それが「文化」という新しい「文」と「思考」が作り出す千年期＝歴史の始まりなのだから。

#### 参 考 文 献

- ・『広辞苑 CD-ROM 版』岩波書店
  - ・『漢字源 CD-ROM 版』学習研究社
  - ・『新英和中辞典 CD-ROM 版』研究社
  - ・『国語便覧』第一学習社
  - ・『仏教辞典』岩波書店
  - ・阿辻哲次『漢字の社会史』PHP 研究所
  - ・『日本経済新聞』98.02.21
  - ・『月刊アスキー』
- ホームページ
- ・『情報交換用符号化拡張漢字集合（案）』日本規格協会 符号化文字集合調査研究委員会
  - ・『Windows NT 漢字処理技術協議会 XKP』

—平成 11 年 7 月 30 日 受理—